

国語教育

第121号

都小国研多摩地区研究会事務局

自立した学習者を育成する国語教育

都小国研多摩地区研究会 副会長 田村 香代子
(府中市立府中第七小学校校長)

AIが急速に発達し、文章の作成や要約はもちろんのこと、今や友達のように会話もできる時代がやってきました。しかし、このAIの力を最大限に活用するためには、使う側の人間の「国語力」が一層必要になっていきます。今「国語教育」の役割はこれまで以上に重要になっていると言えます。AIが答えを提示してくれる時代だからこそ、その答えをうのみにせず、自分の言葉で問い直し、判断する子供たちを育てていかななくてはなりません。自分の経験や感情と結びつけながら言葉を紡ぐことができこそ、情報に流されない主体的な人になれるはずで、「自立」とは学習においてだけでなく、日常生活でも、自分で考え、自分の言葉で発信できるということだと考えます。

私たち多摩地区研究会では、東京都小学校国語教育研究会の研究主題「他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語学習 ～学びを通して身に付けた言葉の力を日常生活で生かそうとする～」を受けて、話すこと・聞くこと部、書くこと部、読むこと部の3つの部会にて研究を進めました。各部会は、研究主題を踏まえて部会ごとのテーマを設定し、自立した学習者を育てる授業づくりを考えてきました。

5月には本研究会 総会を開催しました。青梅市立第二小学校を会場とし、東京都小学校国語教育研究会会長の吉川信次先生をお迎えして、令和7年度の研究の方向についてご講演いただきました。ご講演の中で令和6年度の各分科会の実践について価値付けていただき、今年度のよいスタートをきることができました。

11月に実施した多摩まなび塾は府中市立府中第二小学校において、土曜日にもかかわらず多くの先生方が参加してくださいました。対面でのよさを生かしたワークショップ式の講座では、参加された先生方の熱意溢れる声が廊下まで響くほどでした。講師の先生方の豊富な実践と経験に基づいた大変充実した内容で、明日の授業に生かせる研修会になりました。

さらに、11月から2月にかけて、各部会の研究発表会を開催いたしました。今年度の研究では、身に付けたい力を子供自身が意識し自ら学びを進める授業づくりに加え、国語科での学びを日常生活に生かそうとする児童の育成を目指してまいりました。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれの部会で研究を深め、自立した学習者にしていくためには、「学び方」を身に付けさせる必要があることにも気付くことができました。

他者の意見を受け止め、物事を多面的に捉え、自ら考え、選び、発信できる児童はとてたくましく、これからの未来を生き抜ける力を有していると感じます。国語教育を通して子供たちの未来を明るく照らせるように尽力してまいります。

最後になりましたが、今年度、各研究部の研究に際し指導・講評をいただいた講師の皆様、部員の研究会参加にご配慮いただきました所属校の校長先生およびご協力いただいた研究会会場校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

多摩地区「国語教育」120号の訂正のお詫び

前回多摩地区全域にお送りした、「国語教育120号」の中で多摩まなび塾の読むこと部講師の先生のお名前に誤りがありました。正しくは、大中 潤子先生です。心よりお詫び申し上げます。

単元名 「つなごう役割のバトン！めざせ、よりよい学校生活」
～考えを出し合い、まとめる話し合いを通して～
学習材 「よりよい学校生活のために」(光村図書 5年)
授業者 府中市立若松小学校 飯島 加奈子 主任教諭
講師 東京都小学校国語教育研究会顧問 邑上 裕子 先生

5年生の3学期、「最高学年に向けてレベルアップしよう」をキーワードに、自分たちで話題を決め、話し合いを行った。単元の前半でこれまでの話し合いの学習を振り返り、今の自分の力を自覚し、本単元で身に付けたい力を明確にできるようにした。その上で、自分とグループの話し合いのめあてをそれぞれ設定し、主体的に学びを進められるようにした。単元では、学級全体で話題を決める話し合いを行った後、グループでの話し合いを2回設定し、1回目の振り返りを生かして次の話し合いを行うことで、効果的に話し合いの力を高められると考えた。また、「話し合いをまとめる」ことに課題があると考えている児童が多いという実態から、実際の話合い活動の前に、モデル動画を基に、話し合いのまとめ方をグループで考える活動を行った。

当日の授業では、学級で決めた「団結力を高めるためにできることを話し合おう」を話題に、グループでの話し合い活動を行った。テーブルシートを活用することで、どの児童も理由を伝えながら積極的に考えを出し合い、よりよい意見にしようと粘り強く話し合う姿が見られた。協議会では、児童の話し合いの力を高めるために、テーブルシートやモデル動画をどのように活用したらよいか意見が出された。講師の邑上先生からは、話題の設定や話し合いの力の積み重ねについて、また、単元で身に付けた力が他の単元や教科とどのようにつながる具体化し見直しをもって指導することの大切さをご指導いただいた。

(文責 森永佳代)

【書くこと部】

児童の深い学びを目指す、主体的・対話的な書くことの単元づくり

単元名 「たから島の地図から始まる私のぼうけん」
～〇〇〇〇が伝わる言葉を選んで物語を書こう～
学習材 「たから島のぼうけん」(光村図書 3年下)
授業者 小金井市立本町小学校 木村 千恵 主任教諭
講師 武蔵野教育研究所代表 細川 太輔 先生

「たから島の地図」から想像を広げ、自分を主人公とした物語を考えて書く活動を通して、出来事の様子や登場人物の気持ちが伝わるよう、書き表し方を工夫する力を高める単元学習を設定した。記述する学習過程に重点を置き、4年生への読み聞かせをゴールとした単元学習を構成し、相手がどのように感じる物語を作りたいかを考えることで、目的意識を明確にして取り組むことができるようにした。また、地図の上で紙人形を操作してペアで交流することで、友達との対話のよさやお話づくりの楽しさを感じながら、伝えたいことをはっきりさせたり、想像を広げたりできるようにした。さらに、書き表し方の工夫が不十分な文例の提示、既習事項や書き出しの優れた文章及び「言葉の宝箱」等を参考にして書き表し方を工夫する必要性を実感しながら学習できるようにした。

当日の授業では、動画を用いて書き表し方を工夫する必要感を高め、書き表し方の工夫が不十分な文例とよい文例を比較することで、登場人物の気持ちや出来事の様子を詳しく書くことを意識できるようにした。紙人形を動かして再考したり、動画や掲示を参考に書き進めたり、友達と推敲したりなど、自己調整学習を進める姿が見られた。研究協議会では主に手だての有用性について協議し、講師の細川先生からは、ペアの組み方や中心を詳しく書くことについて、実際にペアトークを行いながら具体的にご指導いただいた。

(文責 山崎 由紀子)

【読むこと部】

自立した学習者を育てる読むことの指導

単元名 「物語の卒業旅行 『海の命』からメッセージを受け取ろう」
～読みの計画を立て物語の世界をとらえて～
学習材 「海の命」(光村図書 6年)
授業者 府中市立小柳小学校 山崎 龍一 教諭
講師 東京都小学校国語教育研究会顧問 井出 一雄 先生

自立した学習者を育てるために、小学校生活6年間の学習経験を生かして学習計画を立て、主体的に作品の主題を捉え読み深めることを目指した。そのために、児童が学習材を読んだときにどのような疑問をもつのかという観点で教材分析を行い、単元全体に関わる学習課題を児童が主体的に作成するための手だてを検討した。さらに、学習課題に適した「読みの三つの柱」を児童自ら選択し、主体的に読み進めていくことを重点として研究を進めた。

〈読みの三つの柱〉・・・①「手がかり」(叙述)②「読み方」③「まとめ方」

本単元では、「海の命」が自分たち読み手に何を伝えようとしているのかを捉えて自分なりの考えをもつために、皆の疑問を整理し学習課題を児童自身が設定した。さらに学習課題を解決するために「読みの三つの柱」を生かして学習計画を立て、既習の学習経験を基に自ら読み進め主題を捉えた。

当日の授業では、前時から本時までで熟成した児童個々の疑問を整理し、共通していた「海の命とは何か」という疑問が題名であることにも着目し、「作者からメッセージを(主題)を受け取る」という単元全体の学習課題を作成した。学習課題の解決のために個々の疑問について考えがもてるように、自ら読みの計画を立てその理由を共有した。講師の井出先生からは、疑問の内容解釈に偏らず、指導事項に重点をおく指導の大切さや、児童が主体的に読み進めるための授業改善についてご指導いただいた。また、既習の「読みの三つの柱」を児童が常に確かめられる教室環境についてもご指導いただいた。

(文責 田中静香)